

妥協許さぬマネジメント

森保監督「あるべき姿」へ高い基準

サッカーワールドカップ（W杯）北中米3カ国大会での日本代表の指揮に向けて2023年に再始動した

森保JAPANの足跡

①

第2期では、森保一監督の指導スタイルが大きく変わった。練習メニュー考案や指示をコーチ陣に任せ、自らは一歩引いて見守る「マネジメント型」への転換だ。主に名波浩、中村俊輔、前田遼一、斉藤俊秀、長谷部誠の各コーチが攻守のアイデアを出し、多角的な視点で戦術を練り上げていった。堂安律（アイントラハト・フランクフルト）のアシストで前田大然（セルティック）が決めたスウェー

一步引いた位置から見守ることが多い森保監督①だが、求める基準は高い

＝三村幸作撮影



デン戦の得点のように、斜めのパスでスペースへ走り込む崩しは練習で何度も刷り込んでいた形だ。

「選手の頑張りはもちろんだけど、名波コーチが、そしてコーチ陣が戦術の落とし込みをチームにしてくれてレベルアップした結果」（森保監督）。手柄は選手とコーチに、責任は自分にとりあえずは買っていた。

今大会は飲水タイムなどにも名波コーチらが具体的な指示を出すことが多かった。では監督は何をしていた。か。戦術の意思決定の他に「途中出場でピッチに入るときにタッチするか、タラタラと歩いているか、どういつころまで見ていた」。日本代表スタッフの一人は森保監督がいかにか細かく選手を観察してきたかを語る。

「凡事徹底」が口癖の指揮官だけに、チームの士気を下げる言動や一体感を損なう動きは「法度」。「オン・ザ・ピッチ、オフ・ザ・ピッチでチームのための立ち居振る舞いができることをを全員に見せてほしい」と言っていたように、試合や練習のプレーだけでなく、自身の序列に対する態度も含めて、あるべき姿を体現できるかも代表選出の基準だった。

日本サッカー協会が公開したスウェーデン戦前の練

エゴ排し自律性を浸透

第2期では名波コーチ②や斉藤コーチ③のアイデアを生かした分業制指導に転換した森保監督



習動画では「きょう試合をやったら俺らは勝てる？」と選手に問いかける場面があった。細かいミスがいつもより多かったことを挙げ、「クオリティーにこだわっていくところを本当にできたかといったら、できていない」「集中力を保つのが簡単じゃないこともわかる。でもみんなだったら絶対できる」。

そんな指摘に、主将の板倉滉（アヤックス）は「大事なところで締めてもらって、自分たちとしても『やらないといけないぞ』となる」。高い基準を明示し、妥協を許さない。それを自分の目が届かないところでも徹底するための策がベテラン長友佑都（FC東京）の招集であり、吉田麻也（ロサンゼルス・ギャラクシー）と南野拓実（モナコ）の帯同だったのだろう。（本池英人）

（本池英人）